



THE GOSPEL NEWS

在日大韓基督教会  
宣教110~120周年  
標語

共に生きる  
いのちの天幕を  
広げよう

1963年9月20日 第3種郵便物認可 (毎月一日発行)

2023年2月1日 (水) 第824号

発行所 福音新聞社 (1部100円)  
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
☎03-3202-5398 info@kccj.jp  
発行人/ 中江洋一・編集人/ 金柄鎬

印刷所 青丘文化社

伝道主日  
説教

# そのためにわたしは 出て来たのである

<マルコによる福音書1:35~39>



朴正根 牧師 (郡山伝道所)

イエスに対する弟子たちの態度をみると、彼らはただ主だけを尊敬し敬い従順に従ったことがわかります。どんな反発も不敬もなくただ従順に従っただけでした。私たちは人生の航海中様々なことで方向感覚が鈍くなりがちです。そのとき主は私に何といわれるのでしょうか。間違いだらけの弟子たちに真の道への処方をごくださったイエスが、今私たちにも同じ処方をしてくださいます。

## 1. 町中の人々が戸口に集まった

前の23から27にはイエスが汚れた霊に取りつかれた男を癒やされた話があり、人は皆驚いて「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。」と論じ合ったとあります。それからイエスの噂がすべてのガリラヤに広がり、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆イエスのもとにつれてきたのです。それだけではなく、町中の人々が戸口に集まりました。(33)

## 2. 人里離れたところへ行って祈られた

そしてイエスにはぎやかだった癒しの現場をお離れになりました。主の奇跡による多くの人々の関心と注目は、イエスが世にいられたことを目的としていませんでした。ゆえに彼らから遠くお離れになったわけです。癒された者からの称賛とお礼を受けようともされませんでした。また癒された者たちとの関係を保とうともされませんでした。イエスはただ父なる神様とだけ関係を持ち続けられました。

## 3. みんなが捜しています

37に、見つけると、「みんなが捜しています」とあります。このみんなはだれでしょうか？ それは癒された者はもちろん、弟子たちもです。弟子たちがなぜみんなに含まれているのでしょうか？それには訳があります。先生のおかげで自分たちの地位が上がるからです。先生が受けるべき称賛と尊敬、そして名誉の一部が弟子たちのものになりうるからです。さて、「捜しています」の言葉の語源の意味は血眼になって探す、必死になって探すという意味もありますが、これは弟子たちと人々がどれほどイエスを欲しがっているかをよく表しています。しかし ルカ4:42後半を見ると、マルコには記されて

ない表現があります。それが「自分たちから離れて行かないようにと、しきりに引き止めた。」です。つまり先生がこの場所にいることによって得られるものに心が強くひかれているのが見えます。

## 4. そのためにわたしは出て来たのである

主は言われました。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでもわたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」(38) イエスの宣教のみ旨は弟子たちの心に水をかけることになりました。なぜなら、多くの称賛と人気をものともしない主のところが弟子たちに伝わってきたからです。弟子たちは期待していました。村には癒された者たちによるお祝いの祝宴がひらかれるでしょうと、またそこには称賛の花束が用意されているでしょうと。しかしイエスのみ旨は異なる次元にありました。それがイエスのいわれた次の言葉に明確に表れています。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでもわたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」

## 5. ガリラヤ伝導のはじまり

39に「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。」と書いてあります。多くのすれ違った期待で胸をいっぱいにしていた弟子たちはいったいどうなったのでしょうか？ 貪欲に目が暗くなって先生の足をもしきりに止めようとしていたその弟子たちはどこにいるのでしょうか？ しかしかれらと先生の後の物語はまったく見えなくて、ただ、主 イエス キリストのガリラヤ伝導の宣言のみの言葉があるだけです。しばらくの間右往左往していた弟子たちに、きっぱりとした方向へと導かれた主のお言葉を、私たちも心に留めるべきです。そしてそのみ言葉にただ従った弟子たちをも覚えるべきではないでしょうか。

## 6. 結論 的確な処方

主の処方によって弟子たちの全ての煩わしいことがきれいに解放されました。そして失っていた方向を直してくださいました。誰でも迷うときがあります。その時その時、正しい宣教の道へと導いてくださる主のみ言葉を覚えていきましょう。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでもわたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」

## 韓日対照讃頌歌販売



韓国の新讃頌歌版です。交読文も韓日対照で掲載されています。

●B6版変型・1483ページ

●価格:2,500円(消費税・送料込み)

※お求めは総会事務所へ

## 講壇掛・ストール販売



在日大韓基督教会ではKCCJのロゴ入り講壇掛・ストールを制作・販売しています。

価格は講壇掛・ストール共4色セットで各1万円(約半額)

講壇掛・ストール両方ご購入の場合は1万5千円です。※お求めは総会事務所へ

西部地方会

# 韓日交流信徒大会開催 席上献金をウクライナ支援のため捧げ

1月9日成人の日に在日大韓基督教会西部地方会・日本基督教団兵庫教区共催による第37回韓日交流信徒大会が在日大韓基督教会神戸教会で開催された。在日大韓基督教会と日本基督教団が1984年に結んだ宣教協約に基づき、西部地方会と教団兵庫教区は1985年以来、「主は一つ、信仰は一つ」の主題のもとに、共に集い交流してきた。当日、西部地方会から4教会29名、教団兵庫教区から17教会47名、合計76名の参加者があった。

開会礼拝は梁昌熙（武庫川教会）大会実行委員長の司会で進み、「主が私たちを一つにされた」（エフェソ信徒への手紙4章1～6節）と題する韓世一牧師（神戸教会）の説教があり、同牧師の祝祷で礼拝を終えた。席上献金は日本飢餓対策機構のウクライナ支援のために捧げられた。

礼拝後、安らぎのひとつとして岩田朋子姉（教団甲東教会）のピアノ演奏を聴き、その後、在日大韓基督教会総会長の中江洋一牧師から「在日大韓基督教会に属する日本人として」と題する講演があり、田永福（織田植治）牧師の話や、在日大韓基督教会の歴史を興味深く聞くことができた。

コロナ感染症の流行により、3年ぶりの開催となり、韓日の信徒が共に集い、共に礼拝を捧げ、共に講演を聞くという意義を各自が再確認した集会であった。今後も途切れることなく続けられることを祈るばかりである。  
**（報告：梁昌熙長老）**



## お詫びと訂正

022年11月号 船橋教会将立式の記事中、写真に「丸徳和博長老」とありましたが「徳丸和博長老」に訂正いたします。

2023年総会手帳の船橋教会「長老 丸徳和博」を「長老 徳丸和博」に訂正いたします。

2023年1月号 新潟教会献堂式の記事中、「東京中央教会 崔興福(최흥복)執事」を「東京中央教会 崔享福(최형복)執事」に訂正いたします。

関係者の皆さまには大変ご迷惑をお掛けして申し訳ございませんでした。お詫びいたします。

## 福音新聞3月号休刊のお知らせ

都合により2023年3月号の福音新聞を休刊いたします。

## 讃頌歌委員会より「子どもさんびか」が 発行されました。

主の祈り・使徒信条・交読文・十戒 集録  
(いずれも韓国語・日本語)  
一冊 1,000円  
お問い合わせは総会事務局へ  
電話 03-3202-5398



関西地方会

# 2023年新年査経会開催 呉永錫牧師(韓神大第3代総長)を講師に

関西地方会伝道部主催の2023年新年査経会が、『主を信じて祈り求めていく教会』を主題に、1月8日（第2主日）と9日（月）の両日にわたって開催された。今回は、韓神大第3代総長の呉永錫牧師を講師として招いた。

1日目は、8日午後3時から大阪北部教会で行われ（40名参加）、『心を尽くしてささげる祈り』（サムエル記上1章10～18節）という主題で説教がなされた。

2日目は、9日午後6時から京都南部教会で行われ（32名参加）、『信仰による決断と摂理』（ルツ記1章12～16節）という主題で説教がなされた。なお、今回は同時に、大阪北部教会と京都南部教会のYouTubeチャンネルよりライブ配信がされた。

また、同日午後3時から、『非凡な弟子の人生』（マタイによる福音書5章1～16節）という主題で教役者セミナーが開催された。  
**（伝道部書記 金有良伝道師）**



## 楊尚眞牧師が召天

### 京都南部教会で奉仕、弘前学院大で教授



青森県弘前学院大教授（宗教主任）の楊尚眞牧師が、持病の心臓病により、去る2023年1月6日召天され、大阪教にて葬儀が挙行された。享年60歳。

故・楊尚眞牧師は1962年故・楊炯春牧師の長男として韓国で生まれ、10歳の時に来日、1992年関西地方会で牧師按手を受けた。

その後東京教会の副牧師、京都南部教会の担任牧師として仕えた。

## <2022年聖誕節献金> (多くのご支援に感謝いたします)

三沢	30,000	大阪	282,000
つくば東京	23,000	大阪築港	5,000
西新井	10,000	大阪西成	20,000
品川	5,000	豊中第一復興	10,000
東京東部	10,000	堺	52,000
東京中央	40,000	武庫川	31,500
愛の伝道所	20,000	姫路薬水	10,000
横浜	46,000	明石	20,000
横須賀	18,000	新居浜グレース	78,000
長野	20,000	広島	30,000
千曲ビジョン	25,500	宇部	10,000
豊田めぐみ	50,000	小倉	10,000
名古屋	187,000	折尾	25,000
大垣	10,000	沖縄	10,000
京都	50,000		
京都南部	10,000	合計	1,178,000円
大阪北部	30,000		

## 2023年/第37回「外国人住民基本法」の制定を求める 全国キリスト者集会宣言

私たち「外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会」(外キ協)は、2023年1月26～27日に第37回全国協議会を在日大韓基督教会川崎教会ならびオンラインのハイブリッド形式で開催しました。「ヘイトクライムと闘い、21世紀移民社会の宣教課題を考える」という主題のもとに、各地外キ連および外キ協加盟各教派・団体、韓国基督教教会協議会の代表者ら52名が参加し、関東大震災の歴史を直視し、和解と平和をめざす日・韓・在日教会の共同課題を確認し、「外国人住民基本法」「人種差別撤廃基本法」の制定と包括的な人権法制度の実現に向けて、これからの取り組みについて協議しました。全国協議会では、在日外国人に対する差別の現状について、またそのような中でも地域に根ざした共生社会を実現しようとする取り組みについて、日本に逃れてきた難民・移民の置かれた厳しい現状について、設立5年を経てさらなる歩みを踏み出そうとするマイノリティ宣教センターの取り組みについて、分かち合いました。そしてまた、イエス・キリストによって語られた神の国の宣教から示される今日の教会の宣教課題について聖書から聴きました。

2023年、関東大震災から100年の節目を迎えます。100年前、朝鮮人を敵視する官憲の主導の下に、民衆の差別心を扇動して自警団が組織され、官民が一体化した朝鮮人のジェノサイドが巻き起こりました。しかし官憲はその事実を隠蔽また責任転嫁し、それが歴史否定論の要因となっています。官製ヘイトが一般に浸透して拡大し、隠蔽と責任転嫁によって糊塗され否定される構造は100年後の今も続き、ヘイトスピーチ・ヘイトクライムを引き起こしています。関東大震災の歴史は、それがジェノサイドにつながることを指し示しています。そのような中、2022年11月には国際人権(自由権)規約委員会から日本政府に出された総括所見では、政府から独立した国内人権救済機関の設置及び包括的な差別禁止法の制定が求められ、国際人権保障のための法制度の創設が喫緊の課題であることが国際的にも明らかとなりました。差別を違法とする法整備を進めるためには、世論を興し、声を挙げて政治を動かしていくことが必要です。そのための地域市民の連帯を形づくることが私たちに求められています。

青丘社(川崎)、信愛塾(横浜)は1970年代、教会を起点として起ち上げられ、民族差別と闘ってきましたが、さらに今ではさまざまな国籍の外国人住民と日本人が共に生き共に生かし合う地域センターとなっています。またこの間に日本は様々な国際人権条約に批准して来ました。

それにもかかわらず、在日外国人を一人の人間として尊重する法制度がいまだに実現されず、多くの人々の命と権利が脅かされている状況が続いています。このために、外国にルーツをもつ子どもたちが必要な教育を受ける権利が守られない状況が改善されないまま長年に渡って放置されています。また、様々な事情で日本へとやって来られた人々が、劣悪な難民認定制度によって収容され命を脅かされる事態が続いています。

パンデミックの終息が見えない中、私たちはこれからも、日本・韓国・在日教会の共同作業を通して、歴史に向き合い、真実と和解に向けた対話を進めてゆきます。また、引き続き「ふくしま」において、外国人被災者、移住女性とその子どもたちとの共同プログラムを継続していきます。さらに世界のキリスト教会と、またさまざまな市民団体と協力しながら、難民申請者・超過滞在者への生活支援に取り組みつつ、入管法改悪を阻止し、ヘイトクライムと闘い、地方自治体に対する「人種差別撤廃基本条例」の制定、国に対する「外国人住民基本法」ならびに「人種差別撤廃基本法」の制定を求める取り組みを私たちは続けていきます。

私たちは今日、在日大韓基督教会川崎教会を会場に、またオンライン参加者も加えて、「第37回『外国人住民基本法』の制定を求める全国キリスト者集会」を開催し、現在の課題とともに未来への希望を分かち合いました。イエス・キリストは、あらゆる差別と抑圧が克服され、すべての命が愛され尊ばれる、神の国の到来をこの世界に宣べ伝えました。自由と解放に向かって、キリストは私たちと共に歩んでおられることを希望とし、さまざまなネットワークを活用しつつ、福音宣教の使命を担うことを私たちは決意します。

2023年1月27日

第37回「外国人住民基本法」の制定を求める  
全国キリスト者集会 参加者一同  
外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会



## <公告> 2023年 総会奨学生 募集案内

総会神学生として各地方会にて認定され、1年を経過した者が申請できます。申請書類は総会事務局にお問い合わせください。

- 募集人員: 3 名
- 支給金額: 年額 200,000 円 / 1 人
- 支給期間: 1 年間 (受給者は、継続して新たな申請必要)
- 必要書類: ①奨学金申請書 ②在学証明書 ③成績証明書 ④履歴書 ⑤堂会長推薦書 ⑥総会神学生認定書 (各地方会試取部) ⑦各地方会長承認書
- 締め切り: 2023年4月30日必着 ※書類提出先: 総会事務局

特別連載  
1

# 1923ジェノサイドの記憶と十字架の信仰(1)

—関東大震災朝鮮人虐殺100周年を迎え—

金性済牧師(日本キリスト教協議会総幹事)

## <1> 演劇『九月、東京の路上で』での戦慄の思い出

私は2018年7月に、東京下北沢で上演されていた『九月、東京の路上で』を観劇に行った。この演劇は、2014年に出版された演劇と同じ表題の加藤直樹による著書をベースにして演出された演劇であった。著書はその副題「1923年関東大震災ジェノサイドの残響」の通り、1923年9月1日の関東大震災発生後に東京をはじめ関東地方で起こった、六千人を超える在日朝鮮人(及び七百人以上の中国人)に対する虐殺の証言集である。

演劇は、その本を手にした5、6人の日本人市民が本を手がかりに、虐殺の起こった跡地を訪ねて回りながら、その歴史を振り返り、語り合い、時々舞台はタイムスリップして、その当時の人々の模様を描写していくという展開であった。それほど大きくはない、舞台を少し下に見下ろす階段状の劇場の最後部席で観劇していた私の心に緊張を走らせたのは最後のクライマックスの場面であった。深刻な虐殺の歴史事件について語り合っていた現地視察参加者たちのところに突然、金網フェンスと棍棒をもったレイシスト(人種差別主義者)集団がやってきて、現地視察参加者たちをフェンスで取り囲んで、罵声を浴びせ脅し始めたのである。フェンスに閉じ込められた人々は震えあがり、レイシストたちはフェンスを棍棒でたたきながら、中の人々を、痛い目にあわせてやると脅迫している。

その時である。フェンスの中の一人がレイシスト集団に向けて放った一言、「私は日本人ですから、ここから出してください!」

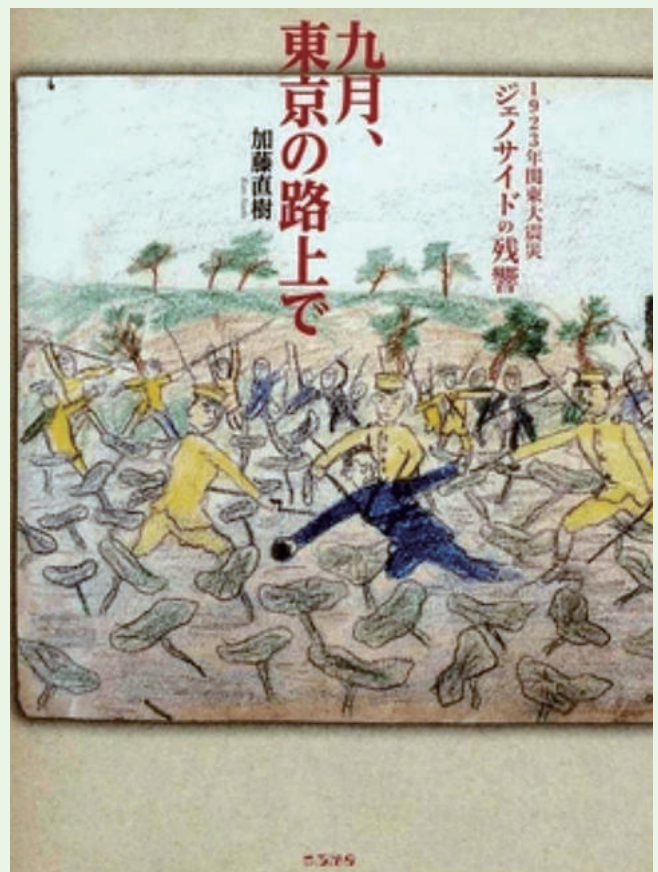
次の瞬間、私は反射的に暗い劇場内の非常口燈に視線を向けていたのである。演劇が終わり、家路につきながら、すでに心落ち着いていた私はその時自分の心を襲った恐怖感について振り返っていた。演劇はものすごい、いや在日コリアンにはきつすぎるくらいの演出であった。登場したレイシストたちが取り囲んだフェンスとは、現地視察グループ役の登場人物ばかりでなく、実は劇場の観客席の観衆全員が一部屋に閉じ込められた感覚になるように演出されていたのである。私はあの瞬間、なぜ非常口に目をやったのか。一人ひとりがレイシスト集団の尋問を受け、「オマエは日本人か、朝鮮人か、どっちだ!」と問いただされることを反射的に想起していたのではないかと。自分の番が来る前に今逃げなくては。これまで講演や書籍でしか知らなかった1923年9月の関東大震災朝鮮人虐殺の眠っていたような歴史がある瞬間に、このように自分の中で目を覚ましてしまうものなのか、としみじみと考え込まされた。実は、演劇が終了したのち、舞台監督がステージに登場して、観客に感想を尋ねる時間が設けられていた。観客の何人かが監督と言葉を交わしていた。私は静かに沈黙して、何も語らなかった。しかし、その時の私の心情は、決して穏やかではなく、ひょっとして怒りに震えていたのかもしれない。私はむしろ監督に向かって声を震わせ叫んでいたのだろう、「監督さん、あなたはこの観客の中に在日朝鮮人もいることを想定しながら、あの最後の場面を演出したんですか、それとも全く想定してなかったのでしょうか。もし私がそう問いかけていたら、監督はどう答えたのであろうか。

自分の中にひそんでいながら、あの時突然劇場で私の心の中

に目覚めさせられたものが何だったのか。歴史には、多くの忘れられていること、また忘れて考えずにいたいと思うことがある。しかし、歴史には忘れようとしても、人の心の深層に、決して消え去ることがなく、そしてある瞬間、突然噴き出してくるものがあるのでは。在日コリアンにとって、1923年9月のジェノサイド(虐殺)とはそのような歴史の一つではないか。そのことをしっかり見極め乗り越えるために、私はあのジェノサイドの歴史を、十字架の十字架を見上げながら改めて向き合い直さねば、と思いを深められる。

在日大韓基督教会は、韓国でもなく、日本でもなく、“在日”という“オイクメネー(世界)”(ルカ福音書2:1の「全領土」)の中の“地の果て”(使徒言行録1:8)に遣わされて115年の歴史を導かれてきた。しかし、この“地の果て”で100年前に起こったジェノサイドの歴史を、それぞれの教会はその意味について風化させることなく、どのようにかみしめなおしてきたか。私たちは、毎年9月第1主日の「人権主日」において聖書の言葉に立ち、このジェノサイドの歴史にどのように向き合い、私たちの遣わされた宣教の“地の果て”からメッセージと祈りを、オイクメネーに向かって発してきたか。在日大韓基督教会は今年9月、このジェノサイド100周年をどのように迎えようとしているのか、主イエス・キリストに見つめられていることを忘れまい。

このすべてのことの始まりである100年前にここ、東京の路上で何が起こったのか、歴史を振り返ってみたい。



<写真> 加藤直樹『九月、東京の路上で』表紙